

# イギリス功利主義・原典コレクション

～ ベンサム、ミル父子の著作・書簡を中心に ～



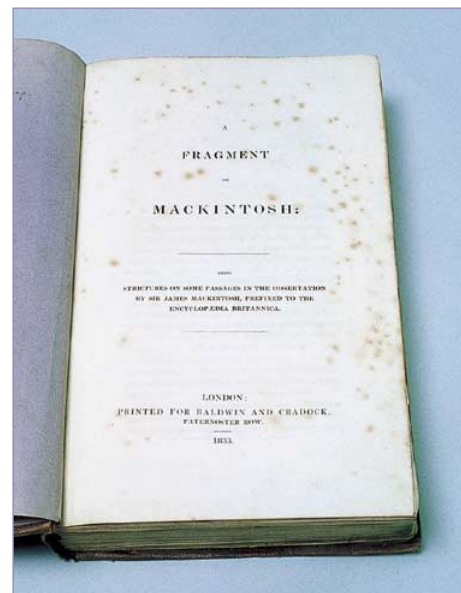
経済学部教授  
井上 琢智

大学では特別図書購入制度を設けている。これは学術的価値の特に高い図書を購入するための制度である。2000年度は原則的に原本であることや大学図書館の蔵書(コレクション)の価値を増幅させるような学術的、歴史的に貴重なものを選定し、「イギリス功利主義・原典コレクション」を購入した。ここにそのコレクションについて紹介する。

関西学院大学図書館は、これまでも「トマス・ホブズ著作文庫」「ジョン・ロック著作文庫」「アダム・スミス著作文庫」「ミル父子著作文庫」「柴田文庫(ロバート・オウエン、ウィリアム・モリス等)」「スコットランド啓蒙思想コレクション」「イギリス社会科学古典資料コレクション」「イギリス社会政策コレクション」など優れたコレクションを所蔵し、国内外の研究者への公開を通じて、研究・教育の促進に貢献してきました。

今回購入されたイギリス功利主義・原典コレクションは、ジェレミー・ベンサム、ジェームズ・ミル、ジョン・スチュアート・ミル父子の著作12点、書簡7通、日記草稿1点からなるコレクションで、上記の各コレクション、とりわけ「ミル父子著作文庫」へ組入れられることによって、本学図書館のイギリス功利主義関連文献が一層充実することは間違いありません。以下で、今回購入された主な原典の概略を紹介します。

ジェレミー・ベンサム(1748-1832)の著作については、これまで本図書館は彼の *Draught of a code for the organization of the judicial establishment* (1790?), *Defence of usury* (1790, 1796), *Plan of parliamentary reform* (1817), *A table of the springs of action* (1817), *Defence of economy against the Right Hon. George Rose* (1817), *Church-of-Englandism and its Catechism examined* (1818), *Observations on the restrictive and prohibitory commercial system* (1821), *An introduction to the principles of morals and legislation* (1823), *The book of fallacies* (1824) 甥のジョージ・ベンサムに出版の年の4月28日に謹呈した *Constitutional code* (1830)<sup>(1)</sup>, *State of [ ]*, *its constitutional code* (1830?), *Observations on the bankruptcy Court Bill* (1831) を所蔵していましたが、今回新たに *Papers relative to codification and Public Instruction* (1817), *The King against Sir*



『マッキントッシュ断片』初版、1835

ミル最後の著作でマッキントッシュの *Dissertation on the progress of ethical philosophy* (1830) への批判書であると同時に功利主義倫理学の基礎を論じたもの。購入本は、この息子ミルの没後、彼の没地アヴィニオンで競売に付されたもので、彼の蔵書であることを示すラベルが貼付されている。

*Chales Wolseley, Baronet, and Joseph Harrison, School-master* (1820), *Truth versus Ashhurst* (1823), *Indications respecting Lord Eldon* (1825)、それに雑誌の抜刷出版物である *On Mr. Humphrey's Observations on the English Law of Real Property* (1827) が加えられました。と同時に、彼のフランスへの影響を示すフランス語訳 *Letters a Lord Peham* (1804), *Defense de l'usure* (1828), *Sophismes Parlementaires* (1840) も加えられました。

父ミル(1773-1836)の著作については、これまで本館所

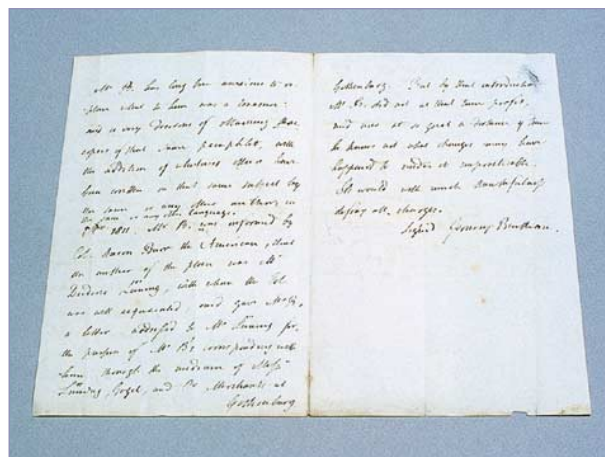
蔵の *Elements of political economy* (1st ed., 1821, 2nd ed., 1824), 同フランス語訳 *Elemens d'economie politique* (1823), *The history of British India* (2nd ed., 1848), *Analysis of the phenomena of the human mind* (1st ed., 1829), に加えて、*The History of British India* の初版 (1817) と息子ミル所蔵本であった *A Fragment on Mackintosh* (1st ed., 1835) が加えられました。

次に、自筆書簡については、ベンサム の J. Colquhoun 宛書簡 (5 March, 1816) の手元控え、さらに、S. Romilly (27 Aug., 1817), H. Brougham (8 Aug., 1818), C. Butler (30 Nov., 1819) のベンサム宛書簡があり、いずれも *The correspondence of Jeremy Bentham* (1968-) にも未収録のものです。また、父ミルのベンサム宛書簡 (3 Dec., 1813), S. Austin 宛書簡 (1827?), W. Molesworth 宛 (12 June, 1832?) 書簡についても未刊であり、父ミルの書簡集の編集が行われる際には貴重なものとして収録されるでしょう<sup>(2)</sup>。

これらの原典に加えて、今回のコレクションの価値をもっとも高めるものは、息子ミルの1820年7月20日から9月15日までのフランス滞在日記です。父ミルから驚くほどの早期教育を受けた息子「ミルの少年時代の最も重要な記録は、彼が15歳の時のフランス旅行の一部の間の日記である」<sup>(3)</sup>。というのはこの日記は「彼の知識の真の特徴とその年頃の彼の知的能力をある程度実証」できるからです。

この早期教育の仕上げとなったフランス留学は、私的にも親しい交友関係にあった功利主義者ジェレミー・ベンサム - この功利主義の普及に努めたのがミル父子 - の弟で工学上の発明の才能豊かなポーツマスの海軍工廠長官であったサムエル将軍の招待によるものでした。彼は退職を機に南フランスに移住していたからです。1819年7月30日、13歳になったばかりの息子ミルは、このサムエルに自分の学習状況を示す長文の書簡を送りました。「あなたにお会いしたのは... 1814年、私たち一家がフォード僧院に滞在した最初の年だったと思います。私の勉学の進歩についてお尋ね下さって誠に有難く思います」という書き出しから始まるこの書簡で、息子ミルは、ギリシャ語、ラテン語の勉強から始まり、ユークリッド、ニュートンで幾何、代数を学び、13歳でプラトンの『国家』を読み、アリストテレス、ホッブズらで論理学を学び、オランダ史、ローマ政治史を書いたと報告し、最後で「フランス語の勉強を始めるでしょう」と書きました。息子ミルにとってこの留学はフランス語の勉強を含む一種のグランド・ツアーでした。

1820年5月15日ロンドンを出発し、18日にパリに到着。父ミルの紹介状を携え「セー法則」で有名なJ.B.セーを訪問・滞在。27日にパリを立ち、6月2日午前2時にサムエル一家の住む南仏トゥールズ近郊のポンピニヤン城に到着。近辺を観光した後の6日からミルは勉強を始めました。ミルは図書室へしばしば通うなどしてボルテールなどの



「ジェームズ・カフェーン宛のジェレミー・ベンサム自筆書簡草稿」(1816年3月5日)

デンマークの調停裁判所に関する文献の調査をカフェーンに依頼する書簡で、ベンサムの手元控えである。

フランス文学を読み、またフランス語で文章を書く練習をしました。さらに微分など数学の勉強やサムエルの息子で著名な植物学者・論理学者となったジョージからは植物学を学びました。留学中、6歳年下のミルは兄のような彼から世話を受けたのです。

8月の初めに一応の勉強が終わり、サムエル一家とミルは8月10日から9月30日までピレネー地方を旅行し、10月になってモンペリエに定住しました。サムエルはこの土地の開拓に熱心に取り組んでいきました。11月になるとミルはモンペリエ大学の公開講座に出席し、論理学、動物学などを学び、数学、フランス語、フェンシングの個人教授を受け、翌年4月中旬までこの地で過ごしました。帰国に際し、パリのセー宅に再び立ち寄り、7月に帰国したのでした。

父ミルは、経済学者デビッド・リカード宛の手紙 (1821年8月23日) で次のように書きました。「ジョンはすっかり成長して、ほとんど大人のように見えますが、他の点では出発の時とそう変わっていません。彼はフランス語がうまくなりましたが、自国語をほとんど忘れてしまい、以前と同じように内気で臆病なように見えます。しかし、彼の向学心は以前と変わらず、従順さと良識を示しています。彼がフランス人の言う愛想の良い人間にはならなくとも、イギリス人の言う温厚で有用な人間になることを疑いません」と。

息子ミルは、このようなフランス留学の状況を日記に書き留めました。それだけでなく、息子ミルは清書した日記を6月2日から11月21日までの間に12回に分けて父ミルへ送りました。これが息子ミルの妹クララによって大英図書館へ寄贈されたのです。その記述期間は、5月15日から8月2日(英語)、8月26日から10月13日(フランス語)です。この清書版のもとになった日記の原本はどこにあるのでしょうか。





- (2)本館が所蔵する息子ミルの6通の書簡は、*Additional Letters(The Collected Works of John Stuart Mill, vol.32,pp.172,184,193,194,210,226)*に収録され、国内外の研究者に利用されている。
- (3)*Bain, A., John Stuart Mill:A criticism with personal recollections*( 山下重一・矢島杜夫訳『J.S.ミル評伝』御茶の水書房、1993、8頁)。

本解説を書くに際して、紀伊国屋書店の佐藤図氏のお世話になった。記して感謝いたします。

### J.S.ミル・フランス滞在日記自筆草稿対照表

	1820	5.15	5.18	5.27	6.2	7.20	8.2	8.10	8.11	8.25	8.26	9.15	9.30	10.13	11.21	1821	2.6	4中	7
British Lib.		E	E	E	E	E	E				F		F						
St.Andrews Lib.		E	E	E				F	F	F	F		F		F	F			
A.Mill		E	E	E	E	E	E	F	F	F	F		F		F	F			
K.G.Lib.							E	E	E	F	F								
		ロンドン出発	J.B.Say 宅到着	Say宅出発	ボンビニョアン館到着 (サムエル・ベンサム借家)			ピレネー地方旅行						10月以降モンペリエ定住	父宛最後の 書簡日付	S.ベンサム 一家との別れ	帰国		

注) 表中のEは英語、Fはフランス語で、8月11日の下にFとあるのは、この日の記述の最初が英語で以降フランス語となったことを示している。

井上 琢智(いのうえ たくとし)

経済学部教授

専攻は近代経済思想史

19世紀後半に生まれた近代経済学の創始者のW.S.ジェヴォンズやA.マーシャルの経済学と思想とその日本と日本への影響を軸に日英の交流史に関心をもっている。

『W.S.ジェヴォンズの思想と経済学 - 科学者から思想家へ - 』(1987)、『馬場辰猪全集』第4巻(編著:1988)、『マーシャルと同時代の経済学』(編著:1993)など。